

タス』を訳了しているとのことなので出版が待たれる。

『セルゲイ・キターエフと第二の故郷日本』(石垣香津)で紹介される日本美術の収集家キターエフの生涯は痛ましくも美しい。海軍将校として日本に寄港する度に浮世絵を中心とした美術品を収集したキターエフは、単なるコレクターではなく、岡倉天心とも親交を結んだ学究肌の人物だった。だからこそその日本美術を見る目は確かで、比較的名前を知られることのない絵師の作品や団扇絵までもふくむジャンルの広さが特徴だという。ルミャンツェフ美術館に保管された収蔵品も革命の混乱で購入されずじまいで、1918年に日本に家族とともにたどり着いた彼の、晩年についてはこれまで謎に包まれていたが、著者はそれを当時の新聞や聞き書きによって解明していく。美の狩人として第二の故郷を再訪したものの、日本はかつての日本ではなかった。瀟々たる成金趣味、それに追い打ちをかけるような詐欺事件にあり、1922年58歳で彼は発狂し、青山病院、松沢病院で晩年を送ることになる。翌年の震災後、家族も米国に去ってしまうが、皮肉なことに精神病院で彼は、日本精神医学の先駆者呉秀三とであり、その学識によってシーボルトの翻訳に協力することになるのである。それから70年近く経って、「帰ってきた秘蔵浮世絵展」が日本で開かれるのは、感動的ですからある。

『ヤンコーフスキー家の人々』(滝波秀子)はポーランド貴族として1863年の反乱に加わり、シベリア流刑にあった一族の三代にわたる年代記であり、この一族が移り住んだ沿海州のシジミ、北朝鮮のノヴィナが、亡命ロシア人の文化サロンとなり、日本、アメリカ、ソ連のあいだで一族の運命が交錯していくさまが、少ない枚数のなかで、立体的に描き出されており、読者の想像力をかきたてる。

またノヴォシビルスクで毎月発行されている旧ハルビン在住者の情報紙『満州の丘にて』をはじめで紹介した松村都の論文も、いまなお亡命文化が生きていることを教えてくれて新鮮である。

民衆史としての圧巻は、農奴の身分でクリミア戦争に参加、解放後日本に住みつき、幕末の箱館を拠点に貿易活動を展開、ニコライの協力者としてロシア正教の布教に貢献したアレクセーエフの生涯を再現して見せた故左近毅論文『存在の証明』である。左近氏は絶筆となったこの論文で、横浜の外人墓地に寄せ棟家屋型の墓碑を残す元農奴の生きざまをとおしてナロードの実像を甦らせてくれた。ここに氏の全仕事の投影を見る思いがする。

(わたなべ まさじ・東京外国語大学)

木下豊房・安藤 厚編著
『論集・ドストエフスキーと現代
——研究のプリズム——』
多賀出版, 2001年, 552頁

田 中 継 根

木下豊房氏の「序にかえて」によれば、本書は安藤厚氏を研究代表者とする科学研究費補助金による共同研究(平成8年～平成10年)の報告書『ドストエフスキーと現代社会』にまとめられた論文が基礎となっている。執筆者26名、論文数40本という壮大な規模の論文集となっている。全体は論文の内容・体裁などから「作品分析」、「比較・対比研究」、「バフチンの視点をめぐって」、「精神分析・宗教的視点から」、「研究ノート」の5部に分けられている。

40本の論文全部について紹介・批評することは紙数の制約上、もちろん不可能であるので、評者の価値基準からあるいは好みから何編かを選んで紹介・批評し、最後にこの論集全体についてコメントさせていただくことにする。

芦川進一氏の「『罪と罰』、隠された女神たち——ラスコーリニコフの下宿空間をめぐって——」は、ラスコーリニコフのかつての婚約者ナターリアに焦点を当てた論文で、ナターリアはその性格・外貌・行動から判断して、作者から「福音書の磁場」を持たされているのは明らかで、ソーニャにつながる「隠された女神」であると論じている。従来、ほとんど注目されてこなかったと思われるナターリアに着目した好論文である。

『おとなしい女』論が3編収録されている。いずれも力作である。まず、木下豊房氏の「『おとなしい女』論——主人公の「不幸な意識」をめぐって——」は、『おとなしい女』の主人公の原型を『地下室の手記』の主人公に求め、その、無限の悪循環に陥った不幸な意識について論じている。氏によれば、『おとなしい女』の主人公は、『地下室の手記』のリーザ、『罪と罰』のソーニャといった、同情の眼差しを注いでくれる存在を持たず、それ故、結末は暗澹たるものになっているが、主人公にとってはその絶望すら歓喜となっている。その意味で、同じ『作家の日記』の『おかしな人間の夢』は『おとなしい女』の主人公・地下室の人間の袋小路からの出口となっていると指摘しているが、けだし卓見であろう。

ヴラジーミル・ジダーノフ氏と鈴木淳一氏の共著論文「ローセフのシンボル論とドストエフスキーの短編

『おとなしい女』は、ドストエフスキーの作品におけるシンボル化は群を抜いていること、ドストエフスキーを理解することはその作品にちりばめられたシンボル群を探索し、その機能と本質を明らかにすることであるとの前提に立って作品論を試みたものである。著者たちによれば、真のシンボルとは、外部（＝意味するもの）と内部（＝意味されるもの）とが差異を有して対立しつつ、どちらがどちらとも判別し難く絡まり合った対立的統合関係のことである。そのような意味でのシンボルが、主人公に対して、また「おとなしい女」に対して作品中にちりばめられており、それらを総括的に解釈することが必要であるという。結論として「現存する世界秩序と妥協することを知らず、それをただ軽蔑し、人工的な観念や原理原則を恣意的に組み合わせることによって真理、調和、幸福の達成を目指せば、その道は必ずや破滅へと至り着くということ」が明らかになるという。その結論自体は特に目新しいものとは思えないが、多彩なシンボルを分析してそこに至る過程はまことに見事と言うべきであろう。

望月哲男氏の「ドストエフスキーの小説『おとなしい女』にみる時間意識」は、主人公兼語り手の時間に対する態度という観点からの作品分析である。氏によれば、例えば、「質屋という職業」、「『ファウスト』のモチーフ」（「時間よ止まれ、汝は美しい」）、「復讐というストーリー」などの観点を分析すれば主人公の時間意識が明らかになるが、そこに顕著に現れているのは「現在との乖離」であり、「現実との距離」である。更に、語り手としての主人公の同様の時間意識、主人公にとっての語るという行為の意義もまた作品の重要な要素として組み込まれていると論じ、「こうして小説は主人公にとって現在の二重の空虚さを描いている。それこそが最終部に現れるよそよそしい時間イメージの意味と思われるのである」としている（168頁）。また、このような「現在からの乖離」が「空想家」と共通するものであるとしている。『おとなしい女』に対するこのような分析自体、大変魅力的なものと評者には思われるが、氏は更に、ロシア全体としての時間からの疎外意識、近代的個人の普遍的問題に論を進めている。最後に氏は、ドストエフスキーの作品が持つ時間というものの様々の特徴を総合的に観察することの必要と、個々の作品をそのような観察全体と照らし合わせて時間という切り口で分析することの必要を説いているが、評者もまた意見を同じくするものである。

萩原俊治氏の論文は4編が収録されているが、そのうち、「わが隣人ドストエフスキー——模倣の欲望をめぐる——」が、評者にとって最も興味深く、また、

本書全体で最も刺激的であった。氏は、ルネ・ジラールの「模倣の欲望」論を紹介し、なぜドストエフスキーが他の作家と違って模倣の欲望に気づくことができ、そしてそれを解明することができたのかという問いに（ジラールを補う形で）十分な説得力を持って答えている。模倣の欲望とは、簡単にいえば、強烈な自尊心を持つ人間が挫折を経験したときに生じる、優れた他者への模倣の欲望、時として分身幻覚を伴うほどの激しい欲望である。ジラールによれば、大半の人間は自尊心を利己主義と同一視し、深く考えようとしない。ドストエフスキーもまた『地下室の手記』を書く頃までは、おのれの強烈な自尊心に気づかず、作品中でも自尊心の強い、それでいてそれに気づいていない人物のみを描いた。だが結局ドストエフスキーは余人と違ってそれを利己主義にすりかえることをせず、逆にそれを「極端にまで押し進めた」（『地下室の手記』の主人公の言葉）。その理由の解明が本論文の主眼となっている。氏によれば、理由の一つは、他者との至適距離を短く取りすぎて容易に相手の自尊心と接触してしまうというドストエフスキーの個人的気質であり、他の一つは、自尊心が制御可能なものから制御不可能なものに変貌していった近代の「文化的時空間構造」、すわなち、神あるいは神性の消滅である。『地下室の手記』にいたって初めて、自尊心と模倣の欲望がドストエフスキーにとって解明すべきテーマとなり、彼はあらゆる物を支配しようとする自分の自尊心に強い疑いの目を向け始める。そして、このあと、彼は様々な試行錯誤を繰り返しながら、次第に模倣の欲望を解明していく。強烈な自尊心とそれに由来する模倣の欲望をキーワードにドストエフスキーを分析したこの萩原氏の論文は、現在の日本の、そしてまた世界レベルの第一級の価値を有するものと考えられる。

評者が特に感銘を受けた論文を数本挙げると以上のようなことになるが、紹介したい論文は他にも多数あるのであって、以下、それらを簡単に紹介する。情報の「伝聞化」という観点から『白痴』を論じた小田島太郎氏の「ドストエフスキー文学におけるイメージと想念の多重性について——『白痴』を題材に——」、物語詩『大審問官』をプーシキンの『エジプトの夜』の続編ととらえた郡伸哉氏の「『大審問官』とプーシキン」、漱石の創作態度の中にバフチンのポリフォニー小説と共通するものを見ようとする木下豊房氏の「ポリフォニー小説の概念をめぐる——漱石からドストエフスキーを見る——」、ラスコーリニコフの「超人理論」の中に「甘え」を見る清水孝純氏の「ドストエフスキーの文学における甘えの構造——ラスコーリニ

コフの場合——」などである。

収録されている全論文を読み終えた今、評者はさわやかな疲労感と満足感を味わっている。疲労感とはもちろん、内容の充実した論文を多数読んだことによるものである。安藤厚氏が「あとがき」で、今や、日本人研究者は国際舞台でも欠かせない存在になっていると書いているが、この論文集を読んで全くその通りであろうと納得できる。そして、現代日本のドストエフスキー研究者の質の高さと層の厚さに驚かされる思いである。また、若い研究者の論文も相当数収録されているが、いずれも将来を期待させるレベルに達していると思われる。

「研究のプリズム」という副題は、恐らく、ドストエフスキーという希有で巨大な現象をもとにして様々の研究の光が発する……といったような意味であろう。確かに、様々の切り口・アプローチの研究がそれぞれに鮮やかな輝きを放っているようである。だが、評者には、物語論からのアプローチがもっとあってもよかったのではないかと感じられる。いずれにせよ、こういう機会でもなければ全部を読み通すことはなかったであろうから、書評の場を与えてくださった学会誌編集委員会に大いに感謝申し上げる次第である。

(たなか つぐね・東北大学)

中平耀著
『マンデリシュターム読本』
群像社, 2002 年, 494 頁
鈴木正美著
『言葉の建築術——マンデリ
シュターム研究 1』
群像社, 2001 年, 249 頁

斉 藤 毅

わが国で外国の詩人が紹介されるとき、作品自体よりも、その詩人についての言説の方が重視されがちな空気があるように思える。たとえば、詩人の作品がさほど翻訳されているわけではないのに、その詩人についての研究書が刊行されるような場合である。それが悪いことだと言いたいのではまったくないが、散文作家の場合、こうした事態はあまり考えられないというのもまた確かである。そしてこのことは、わが国で詩が置かれている位置の脆弱さ——訳詩だけではあまりに弱々しく見えるため、それを支える言説が必要とされるというような——を示しているのではないかと。今回刊行されたマンデリシュタームに関する 2 著作を読んで、以上のようなことを改めて考えた。

中平氏の著作は、『読本』というスタイルをとることにより、詩人の作品と生涯を一望できるように配慮された大作であり、特にこれまで僅かしか日本語訳のなかった 1930 年代の詩篇がここでまとめて読めるようになったことの意義は大きい。このような大作を書き上げられた著者のご熱意には敬服する。しかしながら『読本』に収められた訳詩においては、総じて原文の持つ強靱さが失われているという感が、私にはどうしても否めなかった。語の浮き彫りやシンタクスの捉え方が的確でないため、詩人独特の意味の屈折が平板化された上で日本語に移されている場合が多いように思える。一例だけ挙げるなら、1935 年の詩篇「黒土」の中の一行、「Как на лемех приятен жирный пласт」が、ここでは「犁で起こされた肥沃な耕土のなんと気持ちよさそうなことよ」(367)と訳されている。しかしこれは「приятный на ощупь」(触り心地がよい)のような言い回しを下敷きにして、「犁の刃 лемех」を耕土に当てる際の感触を表現したものであり、さらにその心地よさが「жирный」という形容詞にも共鳴しているのではないだろうか。これを、原文のリズムを保ちつついかにして日本語に移すかという点に、この詩行の翻訳はかかっている。

だからここで問題なのは、翻訳の技というよりは、